

「千葉氏を

語る」だよ

会報誌第15号
千葉氏を語る会
事務局
発行日
令和5年
3月21日

ご挨拶

千葉氏を語る会会長

向後 保雄

千葉氏を語る会会員の皆様には
ご健勝のことをご推察いたします。
今年6月4日には蘇我コミュニティ
センター多目的ホールに於きまして
総会が開催されます。

5月8日には3年以上も悩まされ
た新型コロナウイルスも2類から5類へと
変更され、季節性インフルエンザと
同じ扱いになるとのことです。新型
コロナの感染対策を十分実施し、多
くの会員の皆様のご参加のもと開
催できますことをご祈念申し上げます。
その際、記念講演として、当
会の丸井先生が「東北千葉氏の動
向」について講演をしていただけま
すのでご期待ください。また、会員

有志による「千葉常胤公物語」の紙
芝居が人気を博しております。

今後、多古町アジサイまつりや
成田祇園祭でも甲冑を着て行進し
千葉氏の歴史と功績を公報し、
千葉開府900年に向けて機運を
高めて行く活動も計画されてお
ります。

引続き会員皆様のご理解ご協力
をお願い申し上げます。冒頭
のご挨拶といたします。

紙芝居公演

(会員) 江波戸弘安

一月二二日(日)東庄町公民館にて
主催、千葉城郭保存活用会
後援、東庄町教育委員会、
観光協会

イベント名、

歴史トーク&コンサート
椿の海と暦のコンサート

と、題する歴史イベントへ来場さ
れる方々を対象に時間を少し早め
て別室小ホールにて紙芝居「千葉常
胤物語」の公演を行いました。

会場は持参した手作り甲冑で東庄
町観光ガイドの会土屋会長、岩瀬
さんのお二人が甲冑姿になつて協
力して頂き来場された皆さんには
とても良い雰囲気を感じて貰えま
した。

東庄町のルーツは紙芝居主人公
の常胤の活躍により、その功績とし
て幕府から拝領した全国各地の領
地の一つで、常胤六男胤頼が東氏
として分家独立時に与えられたも
ので今日に至っておるものです。承
久の乱の折の活躍により美濃国山
田庄の増領を受けて美濃東氏(現
郡上八幡)として、更に分家され両
氏とも有力御家人として幕府を支
えてゆきました。

又、和歌や五山の高僧など文化面
でも優秀な人材を多く輩出し戦国
から江戸時代と生き抜いてゆきま
した、この様な素晴らしい歴史を東
庄町の皆さんは“郷土史研究会”の

方々と共に大変大切にされてお
ります。本日来場者 三十三名
有難うございました



次ページに千葉氏を語る会
令和4年度行事活動状況と
行事活動予定を掲載します。

行事活動状況

開催日	事業名	会場 参加者数	題名;	講師;
令和4年 4/19	64回勉強会	きぼーる 34名	題名;鎌倉殿と13人 題名;鎌倉殿と13人の合議制, 重臣たち	講師;日向安昭 講師;高野利太郎
5/10	PR活動	おゆみ野公民館 16名	紙芝居”千葉常胤物語“公演 同内容補助講演 公演者;	日向安昭、江波戸弘安、石橋通男
5/17	65回勉強会	きぼーる 38名	題名;佐倉千葉氏の歴史 (1)	講師;山内 博
6/5	第8回 総会	蘇我コミュニティセンター ハーモニープラザ分館 38名	総会、 記念講演;題名;肥前千葉氏の本拠を探る シンポジウム題名;記念講演に同じ 司会;京極勇剛 パネラー;田中大喜、浜名徳順、丸井敬司	講師;田中大喜
7/19	66回勉強会	きぼーる 31名	題名;佐倉千葉氏の歴史 (2)	講師;山内 博
9/20	67回勉強会	蘇我コミュニティセンター 37名	題名;上総広常と鎌倉幕府	講師;高野利太郎
10/1	会報発行		14号	
10/16	PR活動	多古町コミュニティプラザ 23名	紙芝居”千葉常胤物語“公演、 公演者;	日向安昭、石橋勇男、江波戸弘安、日向夫人
10/18	68回勉強会	蘇我コミュニティセンター 35名	題名;千葉氏家宰、原一族の歴史	講師;山内 博、
11/3	千葉歴史文化 フォーラム	千葉県教育会館 当会員参加38名	題名;千葉氏と房総の馬牧 主催;千葉氏顕彰会 へ協賛参加	
11/15	69回勉強会	きぼーる 28名	題名;黒砂将門落武者伝説に原氏が絡む?	講師;野村康裕
12/20	70回勉強会	蘇我コミュニティセンター 28名	題名;房総里見氏の歴史	講師;山内 博
令和5年 1/17	71回勉強会	きぼーる 27名	題名;源頼朝の生い立ち(挙兵、鎌倉入所)	講師;山内 博
1/22	PR活動	東庄町公民館 37名	紙芝居”千葉常胤物語“ 公演 公演者;	日向安昭、江波戸弘安、日向夫人

行事活動予定

令和5年 2/21	72回勉強会	きぼーる	題名;多古町になぜ中世に数多く城がつくられたか? 講師;日向安昭
3/上旬	会報発行		15号
3/21	73回勉強会	千葉文化センター	題名; 武蔵千葉氏と東 常縁 講師; 山内 博
4/18	74回勉強会	きぼーる	題名; 未定 講師; 未定
6/4	第9回 総会	蘇我コミュニティセンター	詳細 未定
6/18	文化シンポジウム	千葉県教育会館	題名;上総氏と千葉氏 講演会、パネルディスカッション 詳細未定

千葉氏所縁の城跡

東庄町の郷土史会

平野 剛

(一) 平良文館跡

年号が平成から令和になり、天変地異が続いています。元年から日本列島横断の台風が二回も大きな災害をもたらし、被害の甚大さを目の当たりにし、翌同二年は世界的な災禍であるが、日本中を震撼させた、

新型コロナウイルスが猛威を振るわせ、人の活動を制限し、行動の自粛が社会全般の経済の低迷下になっています。中でも観光業は人と人の密ですから一段と厳しい状況になつております。

特に城址巡りに訪れて頂くところは九割方、交通の便が悪く、団体で来て頂く場合、大型車の駐車するスペースを探すのに苦労します。そして見学地の遠方の場合、帰りの時間を気にしながらの時間調整にも苦慮します。また秋から冬にかけての時間は夕方日照時間が短く、時間配分に一層の配慮が求められます。

そんな事から一日びつりの時間の中で色々な疑問点を多く感じるものがありません。そんな事から時間が過ぎていくと、余計に疑問点が多くなり、その後の問い合わせ事項が次々に寄せられてうれしいやら、有難いやらの複雑な気持ちで資料探しに苦慮した事もありました。

世界中が自粛ムードのコロナ騒ぎに巻き込まれている最中に、何らかの形で活動が出来るのは数人の人数に限られ、派手に立ち回れずの活動でしたが、ごく近くで知られる様で知らない、隠れた存在を探してみました。

平良文は東庄郷土史研究会としての今後の研究課題候補に挙げられている「大友城址考」に関連する。平良文は大友に城を造り、自身は阿玉台に館を構え住んでいたと伝えられています。場所は一体何処なんだろうの疑問が浮かび、地元はともかく千葉県内に知れ渡っている、阿玉台の郷土史大家の福本氏にお願いし、早速数人の賛同者が集まり福本氏に案内のご足労を頂きました。場所は香取市旧良文村貝塚字本立、道路は

旭、笹川間道の小貝野三差路より西に入り約一キロ程、廃校になった元小貝川南小学校の手前三差路を左に一五〇メートル位行くと左に駐車場があり、直ぐ隣り先は菅佐原家「芳源ファーム」マッシュルーム工場があり、工場真後ろの小高い丘上台地に杉の原木が、数本見えるところが館あとである。

そこまでは数年前まで小さい道路であつたが、今は何の跡形もなくガサ藪となり、人の出入りは困難を極める。当初は平良文の館と家臣等と思われる住居が五く六軒あつた様で、その後三軒位がそこから南西へ二百m行つた現在の阿玉台集落へ移り住んだと伝えられています。その住居跡は土台や食器類の焼き物らしき破片が、戦後数年頃まであつた様で、その後は丘状の部分が削られ低くなり、なだらかな状態で現在では跡形もなく、その痕跡すらもこされていらない。

平良文は仁和2年(八八六年)京都で生まれた、十数年後相模国村岡に移り、「村岡五郎良文」と称した。兄弟の国香や良将の關係で常陸国辺りにもいたという説もある。良文に当初の頃は世継ぎが

無く兄の良将の子、将門を養子にして関東一円に勢力を広げて活動を共に広げていた。そうこうしているうちに良文に四人の子が出来、一族で身内同士や同盟關係との争いが多くなり、戦乱状態が長く続きました。

九百四〇年鎮守府將軍兼陸奥守となる。そして将門の叛乱が終わり、将門の旧領を引継ぎ上総、下総、常陸介となる。天慶三年(九四〇)五月、良文は相州(現神奈川県)村岡より総州(現千葉県)大友へ来たという説と「長元の乱」を起こした平忠常(良文の孫)の居城という説があります。

忠常は下総介武蔵押領使として初め上総国上野郷に住みその後下総国海上郡大友城には常将、常永、常兼四代続き常兼の時、上総(現千葉県緑区大椎町)大椎城(忠常の築城との説もあり)に移った。

良文の養子となつた将門は天慶の乱を起し、今の関東一円に勢力を広げた。朝廷は危機感を感じ源満仲に征伐を命じ、しかしそれより早く平氏一族の内乱によつて、将門は討たれ天慶の内乱は収まつ

た。その後約百年後忠常の乱が起こり長元四年(一〇三二)忠常は降伏し美濃で病死した。しかし忠常の子孫は房総半島の有力武士と残り、鎌倉時代に活躍した上総氏、千葉氏の祖となりました。

(二)平氏から千葉氏へ

良文の子忠頼、次の代忠常から下総を主な本拠地に、常将、常長と続き、その後、五代目に当たると頼は東庄を領した。常将から千葉郡を本拠地にして初代千葉氏を名乗り、二代目常兼は八二歳まで生存し、死後千葉市中心部の千葉神社隣り、現通町公園に真言宗豊山派)大日寺が開かれ、千葉氏三代目までの常将、常長、常兼の三代が祀られている。寺は戦災により焼失し現在は轟町に移転された。

千葉家四代目常重は現千葉市猪鼻城(現千葉市郷土博物館)に移った。享徳三年(一四五五)頃猪鼻城は焼失する。天正一八年(一五九〇)豊臣秀吉の小田原攻めにより、千葉氏は北条氏についていた為、諸共に滅亡した。良文を始祖とする平氏の一門は、それぞれの

活躍した人によって違いあり、時代によつて又生き方が違いありでした。良文は相模国村岡から、下総国千葉の大友に築城し、同阿玉郷に館を構え同海上郡周辺及び香取海、樺海を支配していたと伝えられています。良文から三代目にあたる忠常が平安時代中期に上総国大椎に大椎城を築城したと言われている。

一方忠常の館に関する伝承があるようだが、「ちば伝考記」は忠常の孫常長が、前九年の役の功により大椎の地を賜わり、次の常兼の代に大友城から大椎城に移ったように書かれている。約千年の前の事だが史実はともかく、城はあった事は事実らしいので、現実の実態を把握するのも一つの方法なので現地に行くことにした。

大椎城はJR外房線土気駅から徒歩三十分の場所にあります。城址の北隣はあすみ野高級住宅団地になっています。開発前の付近一帯は小高い丘陵地帯で、中小の砦が多数あったが宅地造成で、なだらかな丘状の区画によつて段差がついた分譲地で、一時は新築一軒家が二十億

円で取引され、ビバリーヒルズならぬ、チバリーヒルズともてはやされた超高級住宅街となっている。このあすみ野団地の中心を南に下つて田園に突き当たる、右に曲がりカーブ沿いに行くと農家集落地、農村地帯の大椎城址となり、集落の南端狭い道を曲がりくねりながら、行き止まりの長屋門を潜ると、大椎城跡の山の真下にある「林家」に着く、長屋門は一瞬「あれっ」と思うピンク色の塗り壁ではないか。後に当家の奥さんに聞きましたが門を修復した当時、終戦後の物資不足で、木材が集まらず止む無く塗り壁にしてしまったので、今後改修する予定だそうです。大椎城址の台地は標高七十m位で東、西、南と三方開けた見通しの良い島状の台地で北側は他の山と連なる部分は狭くなっている。

「林家」が代々相続しているあすみ野団地の開発の時、相続が発生し大金納税した話をしていました。山の城址中央部近くと住居宅地との連絡通路があり、通行止めの際が作られ鍵が掛け

られているが、鍵を預かり上ることが出来た。そこから暫く歩くと約四十年位前に千葉市の公園指定の石碑があり、林家では私有地とのことですが、ガイドブックによるとあすみ丘第八緑地公園になっている。大椎城址は四方をほとんど谷に囲まれた東西に長い丘陵に立地し、丘陵は空堀により四つに区画されました。

山の中腹に小さいながらも社造りの立派な、稲荷神社が祀られていた。林家に聞くとお稲荷さんは農業の神様だから、周辺の家は皆さんそうだといいので、周りの家を見渡すとほとんど赤い色で塗られた、稲荷神社が宅地内に諏訪神社の後ろにあるものと匹敵する。それよりは一回り小さいが立派な社が祀られている。山は相当広く感じ、杉の木立が鬱蒼として手入れが大変だろうと思います。

大治元年(一一二六)千葉常重が千葉市中心部の千葉城(猪鼻城)に本拠を移したがその後も千葉氏の一族が入った。南側の城下の集落には代々名主を務めた家があり、

千葉神社に移されたとされる祠がある。

参考資料……

平良文大友城を築く。

下総多田源氏の会。

フリー百科事典

「ウイキペディア」日本の

城ガイドブック

「お城散歩」他

千葉胤正について

会員 高野利太郎

一、はじめに

今回は千葉常胤の嫡男胤正について解明したいと考えて見たいと思います。まず千葉常胤は大治元年（一一二六）六月一日、父重常と共に千葉郷に移住して館を構え、ここから千葉氏が後に大きく発展するのです。

常胤はその子が一人認められます。彼は、秩父重弘の娘と結婚して、六人の男子が生まれたとされています（千葉大系図）。即ち嫡男胤正、次男相馬師常、

三男武石胤盛、四男大須賀胤信、五男国分胤通、六男東胤頼の六人です。しかしその他に以仁王の挙兵の時活躍した天台宗園城寺の僧侶日胤と千葉郷の北

斗山金剛授寺尊光院の第四代座主覚伝（千字集抜粹によると常胤の第七男という）以上八人の男子と更に五人の息女が記録されている。（鈴木佐・千葉常胤の妻と息女たち）この息女については後に述べることにする。

二、胤正の登場

さて治承四年（一一八〇）六月京都の以仁王の令旨が出されたことを聞いた頼朝に対して『延慶本平家物語』によれば、北条時政は「上総介八郎広常・千葉介常胤・三浦介義澄此の三人ヲ語ワセ給へ、此の三人タニモ随付マイラセ候ナハ……広常・常胤・義明、是等三人タニモ参候ナハ御手下ニ恩食ヘシ」と云つたと伝えられている。

胤正が初めて千葉氏関連資料に登場するのは、治承四年（一一八〇）八月、源頼朝が石橋山の合戦において、平清盛の御家人大庭三郎景親の軍勢に敗れて安房国に逃れ、再起を図って東国の武士団に、

以仁王の令旨を基に平家追討の要請をした。当時の東国武士団の多くは、二十数年前平治の乱において源義朝が清盛に敗れて以来、不満な年月を送っていたので、頼朝の

挙兵について賛同する者が多かった。特に千葉氏は平清盛政権下の下総国衙によつて常重の公田官物未納理由として相馬郷を国衙に譲り渡すような証文を作成させられた。常胤はその公田未納分を納たりしてもなお当時の義朝とも論争になり、長い間、苦勞の連続であり誰にも相談も出来ず不遇連続であった。

吾妻鏡によると、上総国、下総国においても上総広常に対しては和田小太郎義盛と千葉常胤に対しては安達九郎盛長に使いとして参加を指示した。その使いの間に常胤は嫡男胤正と六男頼胤を同席させている。（胤正は四十才・胤頼は二十五才・頼朝は三十四であった）使いの盛長と対面した常胤はしばし沈黙し語らずして居たが胤正等は父に対して直ちに参加する旨の回答をするように促した。

頼朝はその報告を受けて大変喜んだ。頼朝が安房国から上総国に入る前には上総の国府を上総介広常と千葉常胤の軍勢が平家方の国衙軍を破り国府を制圧して源頼朝を迎えた。この時点で胤正は父上と共に行動して千葉館を出て上総国府にいたと思われる。それは『源平闘諍録』によると源頼朝が上総国から下総国に向かう。治承四年（一一八〇）九月四日、爰に上総権介広常、右兵衛佐の御前に跪きて申しけるは、「君は此の程の軍に疲れさせたまいしうへ、兵共進み難くす。荒手の随兵を以つて広常先陣を仕らんと欲す。（中略）一千餘騎兵を卒して発向すベき」由を申す処に、千葉常胤申しけるは「権介の所望謂れ無し。他国は知らず、下総国において他人の綺有るまじ。常胤先陣を仕るべし」とて相ひ従う輩は、新介胤正・次男師常・同じく田辺田の四郎胤信・同じく国分の五郎胤通・同じく千葉の六郎胤頼・同じく孫堺の平次常

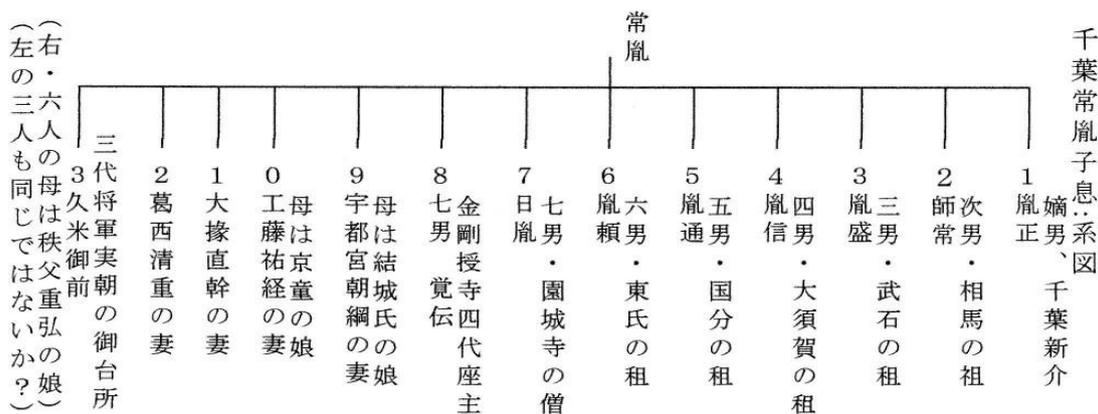
秀・武石の次郎胤重・能光の禪師等を始めと為て、三百余騎の兵を引率して、下総国へ打ち向かひけり。と記されている。

また、常胤一族が千葉の館を留守にしたその時、平家の方人千田親正は右兵衛佐の謀叛を聞いて一千余騎を率いて千葉郷を襲撃する。留守を預かる胤正の子成胤が僅か七騎で奮戦し、かぶろ髪（妙見）が現れて危急を救う。

やがて上総の国府を出た広常・常胤の軍勢も到着して親正は千田に退く前に捕らえられたと言う説もありこの時頼朝の軍勢は一万騎以上に膨れ上がっていたと思われる。下総国千葉庄では常胤の接待で北斗山金剛授寺尊光院に詣でて常胤に対して妙見菩薩の由来を問う。当時としては珍しいお茶の接待も受ける。

やがて千葉庄を出て、下総国府に向かう。下総国府では大井川（現江戸川）・隅田川の渡河の方法以仁王の令旨に賛同する東国多数の賛同者で日時を費やしたが、常胤・上総広常等の働きで十月二日に大井川・隅田川を渡って武蔵国に入る。

千葉常胤子息系図



ここで常胤は子息や郎従たちに厳命を加えて上総国に派遣し、伊北庄司常仲（伊南新介常景の子息）を追討させ伴類を悉く捕らえさせた。胤正が特に勲功をあげた。この常仲は長佐（長狭）六郎（常伴）の外甥であるために殺されたという。吾妻鏡によると十月六日頼朝は鎌倉に入った。十月二十日には富士川の合戦に勝利し、相模の国府で論功行賞を行う。その節常胤は領地を安堵したり、新恩を給与されたりした。

十一月には常陸国の佐竹氏を攻め、城壁を焼き払った。続いて十二月十二日頼朝は広常の館から新邸となつた大倉御所に入られた。千葉常胤一族からは胤正と頼胤が参列している。

大倉御所に入った頼朝は侍所を設置したりして、治承五年（七月四日）で養和と改元）四月七日には弓矢に優れた者で信頼の厚い御家人（千葉太郎胤正ら）が十一名毎夜御寝所の近辺に祇候するように選ばれた。養和二年（一一八二）三月九日御台所（政子）の御着帯の儀が行われた。特別な仰せによつて常胤の妻が御帯を作成して胤正がこ

れを献上した。頼朝自身がお結びになった。

同年寿永元年（一一八二）八月十一日御台所がお産の気配が在り頼朝がお渡りになり、近国十社にご祈禱の使いを出した。胤正が下総国香取社に遣わされた。御台所は目出度く嫡男を出産し、十八日にはお七夜の儀が行われ常胤は六人の子息を伴つて取り仕切った。

寿永三年（一月）頼朝は木曾義仲追討のため、範頼、義経を派遣して成功する。ここには常胤とその一族が参加して功績を挙げる。続く寿永・文治の源平の合戦に常胤は範頼の配下で参謀として貢献し、西国豊後国へ渡つて九州の平家軍を制した。頼朝は弟範頼に対して常胤を大事に扱うよう指示した。文治元年（一一八五）三月平家は壇ノ浦で滅亡した。続いて頼朝は亡父義朝の菩提を弔つた供養を行う。

ここに常胤以下胤正等一族が参列する。文治四年鎌倉では嫡男頼家の着甲の儀が行われ、胤正と師常が「御甲納櫃」を担ぎ、常胤が着甲して甲親になる。

文治五年（一一八九）頼朝は奥州藤原氏征討のため常胤に軍記

一流の調達を命じる。頼朝軍はこの軍記をかざして、三軍①太平洋側沿い②郡山を通る中道③日本海側沿い)に別れて平泉を目指す。常胤は①の東海道大将軍として多賀国府で頼朝と合流する。合戦後論功行賞に於いて常胤は恒例により、最初に拝領して陸奥国の伊具・亘理・宇多・行方・磐城の五郡を賜る。次いで建久元年(一一九〇)胤正は頼朝の上洛に際して右近衛大将拝賀のおり布衣侍七人の一人に選ばれ登殿した。

建久二年(一一九一)正月元旦の境飯は常胤が献上した。先ず進物と手御剣は常胤、御弓矢は胤正、御行履・杵は次郎師常、砂金は三郎胤盛、櫃に収めた鷲の羽は六郎胤頼が進めた。その後酒宴・歌舞が行われた。同日頼朝は鶴岡若宮に参詣された。この時も神馬三頭が引き並べられた。うち一頭は次郎相馬師常が担当した。建久六年(一一九五)二月頼朝三度目上洛して使節には千葉常秀・随兵には胤正・相馬師常・大須賀胤信等の一族が参加する。

建久十年(一一九九)一月頼朝逝去する。吾妻鏡にはその十二年後の建暦二年(一二一二)二月二十八日の項に僅かに落馬した為その後死去と触れているのみである。その直後の四月十二日には二代目頼家は十八才で将軍となり父頼朝以上に指導者、独裁者として望もうとする、そこで将軍としての訴訟について直ちに決断することを停止し十三人の合議制による事を決めた。明らかに頼家に対する牽制である。それは御台所政子・北条時政・義時三人による執権制度の芽生えであります。この中には常胤は含まれていない。

しかし同年十月二十八日には今度は十三人の一人梶原景時への批判が相次ぎ千葉常胤を筆頭に十六人の御家人が景時を指弾する神に誓う訴状であります。その中には「鶏を養う者は狸を畜わず。獣を牧う者は豺を育てない」と記されていたのです。

その書状は中原広元朝臣に渡し、ここに常胤が筆頭で署名して胤正が三番目に署名してあります。正治二年(一一二〇)一月二日今年の境飯は常胤が行った。その後

正治三年(一二〇一)三月二十四日常胤が死去した。享年八十四才であった。更に二年後の建仁三年(一二一三)七月本稿の主人公胤正も亡くなった。享年六十三才であった。(異説在り)

三、まとめ

胤正と頼朝が出合ったのは治承四年(一一八〇)頼朝が伊豆に挙兵して石橋山にやぶれ安房国に逃げ延びた時からで頼朝が死去する建久十年(一一九九)までの十九年間短い間であった。父常胤が長生きした事もあり胤正が、千葉一族の長として後世に記録されるような活躍はすくなかったと思われるが、嫡男であるため父や六党の弟たちが各地に出陣しても千葉館をまもり、留守を担ったことが伺えます。それでも頼朝と対面したとき、あるいは父に対して提言に必要なことは積極的にに行い、又鎌倉にも館を持つて幕府に協力したことが伺えます。最後に千学集抜粹の一部を引用して結論と致します。

一、胤政在鎌倉にて弁谷殿と申、観応と称す、御年六十三音損館、法諡を常仙院殿と申、実に建仁三

年癸①七月廿四日也、(以下省略)

四、付録

はじめに申しましたように常胤の五人の息女について「千葉常胤の息女たち」を引用すると次のようになります。

即ち①『曾我物語』によれば宇都宮朝綱の妻は常胤と結城氏の娘との間に生まれた女子で「芙蓉のまなじり、丹花のくちびる」と描かれている。②『義経記』によれば工藤祐経の妻は常胤が在京中に京童との間に娘が生まれ成長して後冷泉の局と呼ばれた。後に伊豆国の御家人工藤祐経の妻となった。③『鐔木本千葉大系図』によれば常胤の娘の一人が大掾直幹の室となつている。そして男子二人を設けたとある。大掾氏とは常陸国に広大な領地を開発した名門である。④『続群書類従本 笠井系図』には下総国葛西清重の妻に常胤の息女がいる。葛西氏は清重の戦功により陸奥国に領地を与えられ「奥州惣奉行」となりその子孫は長く一五九〇年代まで岩手県南から宮城県北部地域で繁栄したとされる。⑤埼

玉県新座市にある浄土宗法臺寺の寺伝によれば「久米御前の己日承久元年（一一一九）九月十四日世寿二十五才・法名広澤院殿從二位承山法臺禪定尼 出自・下総国豪族千葉常胤御息女久米子而 鎮守府將軍右大臣源家第三代実朝公御台所也」とある。

島と志摩城再考

千葉城郭保存活用会代表

多古城郭保存活用会

匝瑳城郭保存活用会

事務局長 小室裕

多古町の島は、日蓮宗不受不施派の隠れ里と言われる場所である。島の集落は今でも、複雑な迷路のような通路が巡るとともに各戸の敷地内に隣家との抜け道が多く存在する。このような集落内の内容は、江戸時代に信徒たちが不受不施派の僧侶を幕府取り締まりより逃がすために設営した一連の対策であったと考えられており、マスコミ等にもそういった報道がなされることが多い。

しかしながら、江戸時代以降に作られた集落内の植塀（まきべい）との連関性を持つ、

抜け道の件はさておき、少なくともその複雑な集落内の通路は、中世の志摩城との関連性から、生じているとの考えも地元では一部持たれていた。

2019年に多古町内外の有志で設立された多古城郭保存活用会では、こういった地元の考えに触発され、全く新しい目線で、集落内の現地調査を行った。

そこで、新たに見えてきたこととして、島の集落内に今も断片的に存在すると言つて良い、

各戸をかつて取り巻いていたと思われる大きな土塁の存在である。

島集落内には、その土塁の大きさとして、基底部6メートル以上、現状でも高さが2メートル以上の屋敷地を囲むと思われる土塁の遺構が散見される。

この土塁の大きな特徴は、集落の外側のみを総郭的に囲むのではなく、各戸ごと隣家との境界においても存在するものであることです。ある意味、各戸ごとの敷地をぐるりと囲む形で存在するのである。

この土塁は、その大きさから言うて、民家における目隠しや風よけのために作成されたものとは到底考えられず、その大きさからみても江戸期に入ってから築造されたものとは思われない（江戸期においてこのような巨大な土塁を人家の周辺に築造すれば、それは即、幕府に対する、反抗の準備とみなされ、築造が認められることは考えられない。）

そこで、これら土塁が中世・戦国期に置いて、築造されたものと仮定するならば、各屋敷地を土塁が囲んでいた形態、すなわち、近傍の篠本城で発掘の結果明らかになった「群郭」の形態を島の集落がとっていたと見れることとなり、このことは従来考えられていた志摩城の範囲が「一の台」「二の台」だけにどまることなく、城下町全体を群郭と捉えたお城と考えるべきであり、このことは独立丘陵として、存在する島全体が中世期は要塞であったということに結びつこう。享徳の乱の際に千葉家当主 千葉胤直が自刃した場所は多古町の東禅寺という考えが鎌倉大草子等から、一般的には流布されている。

しかし、本土寺過去帳によれば、千葉胤直自刃の場所は島の妙光寺（現在の正覚寺）であるとされる。この点において、城下町を群郭としてとらえれば、何よりも妙光寺の位置は、もつとも奥まった場所すなわち主郭と評価して良い場所であり、総大将としての千葉胤直が自刃する場所としても全く違和感はなくするのである。

編集後記

編集子

大変遅くなりましたが、会報誌十五号をお届けします。今回号では、投稿文で東庄町の郷土史会 平野剛さんの「千葉氏所縁の城跡」と会員高野利太郎さんの千葉常胤嫡男胤正について、多古町城郭保存会の事務局長 小室裕さんの「島と志摩城再考」の論文を掲載致しました。皆様のご協力ありがとうございました。